
永遠の居場所 ~ Eternal Whereabouts ~

敷島 えるだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の居場所〜E t a r n a l W h e r e a b o u t s〜

【Nコード】

N1043E

【作者名】

敷島 えるだ

【あらすじ】

魔大戦、すべてが荒廃した世界で出来たたった一つの特別……。ちよっぴり切なくちよっぴり懐かしい。そんなどこかにあるかもしれない永遠。想いを奏でるレトロな物語……。あなたは永遠を信じますか？永遠は優しいですか？辛いですか？そんなありふれた世界にある永遠は近いものかも知れません。短編集のような物語に是非回顧してもらい泣きし、そして少し微笑んでください……。

序章『少女と魔法の本』（前書き）

他サイトでも執筆しているこの小説はわかりやすく書いていますので初心者の方向けです。一部精神的に残酷な表現がありますのでご注意ください。

序章 少女と魔法の本

魔大戦

この世界を2分して争った古の大戦。

犠牲者の数は数知れず、今では復讐の復讐の復讐……と、終わらない連鎖になっていました。

ある小さな村。

何もない、たった一つ世界とは離れている幸せがありました。そこにいるのは銀髪の親子。

優しく聡明な母に、少し人見知りな姉、そして姉を誰よりも慕う弟がいました。

三人は一緒にいれば楽しい、そう思うほどでした。しかし、ある日突然暗い暗い暗雲が立ち込め、村に火の手が上がりました。

村人は逃げ惑い、炎になす術なく包まれ、あるいは突然現れた人間に魔機と呼ばれる兵器で殺されました。

これはそんな始まりの物語。

人見知りな姉もまた右足を撃ち抜かれ、じわじわと死を予感していました。

私はここで死ぬんだろうな…、哀しくなんてないけど二人は無事かな…。

そう使いものにならない右手を空に上げて言いました。

そんな時、突然現れた神は彼女に問いかけました。

『永遠を望むか？』

と、たったそれだけを。

そして彼女は言いました。
『幸せがあるなら』と。

それは寒い寒い冬のこと。銀の髪を靡かせて仰向けに横たわる彼女は死にました。

安らかに安らかに……。

ふと彼女は目を覚ましました。

どうしたんだろう？私死んだはずだよね？

そう自分も混乱してました。

なくなったはずの右足がキチンと体にくっついていて曲げ延ばしも出来る。

ここは天国なのかななんて淡い思いもしましたが、彼女がいる場所は本がない本棚がいっぱいある図書館のような所でした。

ここは何だろう？

それに私はこんな服を着てたっけ？

見てみると白と赤のお気に入りだった服が灰色の服になっていました。

それに、そこにはゆったりとした足で歩いてくる少女がいました。

その少女は入れ墨のような、どこか歪なマークを顔に刻んでいました。

「……、ここに関係する人物ではないようですが、何のようですか？部外者は入れないはずですが。」

少し困惑しているみたいな、冷たい感じのする入れ墨少女はそう言いました。

少女も自分が何故ここにいいのか分からないものですから、どう言っているのか分かりませんでした。

歪な入れ墨の少女はほんの少し頭を傾げて、また元に戻しました。

「【不死者^{エルフ}】…それも新しいエルフですね。この場に現れたのはまだ良かった。と語訳的に言うんでしょうかね。」

くくつと皮肉な笑みを浮かべ、少女に手を差し伸べました。

「ついてきて下さい。私達は貴女を歓迎します。」

少女は頷くしかありませんでした。

広い廊下は延々とあるので少し嫌だなあなんて思いました。

昔、絵本で見たようなお城の中にいるみたいで物珍しいものがあり、触れてみたかったのですが、入れ墨の少女は先へ先へと進むので名残惜しく見てるだけでした。

やっと、大きな扉がある場所に着いて少女は少しだけ溜め息をつきました。

少女は元々人見知りなのでなかなか話せないのです、この先に何があるのかちよつとだけ憂鬱な気持ちになっていました。

ギイイイ……

木製の扉が開きました。

そこには一人、ゆっくりと背もたれに座った偉そうだなと思ってしまふ変な尖った耳をした男の人がいました。

その男の人は少し髭を伸ばした不精な感じがするのに高級そうな服を着た不思議な人でした。

「ラナ、いきなり話もせず何のようだ？また俺の秘蔵の煙草を没収する気か？」

男の人は口でくわえている煙草を上下に訝しいとばかりに動かしました。

ラナという少女は何も気にしていない様子で煙を手で払いのけまし

た。

「葉巻と大麻を間違えて吸っていた馬鹿に忠告しただけです。それともあのまま頭ノータリンになってますか？」

忠告ともただの罵倒とも取れる言葉で言い切ったラナは何やら満足げにしてました。

大丈夫なのかと少女は頭を傾げました。

「その娘、君は新人さんか？」

なんてさつきまで子供っぽく言い合ってた人がにやけながら言ってきました。

そのとたん、

ガスッ！！

ラナの右手がまともに男の人の頭に凄い衝撃で当てました。

「変な意識を持たせないで下さい。今回は特例の【不死者】なんですから。」

そう言うのと右手をひらひらと振って平然な顔でスタスタと出ていってしまいました。

「はあ……まったく、ラナももう少し可愛らしく設定しないかなあ……」

なんて机に張り付けていた顔を上げて頭をさすりながら愚痴を男の人はこぼしました。

「……………」

少女は人見知りのせいよりも先程の事でびっくりして喋れませんでした。

「どうして部屋の隅で縮こまってるんだ？さつきと契約して欲しいんだが？」

今ではすっかり普通に羽ペン持つてる男の人に驚きながらも言い返

しました。

「契約……？」

少女は何も聞いてないので契約すら分かりません。

一方の男の人は目を見開いて驚いていました。

「なっ……契約を知らない！？じゃあこの【永遠の古城】アヌタールアにどうやって入った！」

口にしようとしていた煙草を落として大慌てです。

その姿を見た少女もやはり大慌てです。

あたふたあたふた……まったく落ち着きがありません。

そしてこのおかしげな光景を誰が止めるでしょう。

結局二人が落ち着くまでたっぷりと時間が浪費されました。

「……つまりは気が付いたら図書館にいた訳だな？」

ようやく落ち着いた2人は少女の不思議な事情について話し合っていました。

「はい。私、死んだはずなんですけど何故こんな所にいるのか分からないんです……。」

少女は少し大振りな椅子にちょこんと可愛らしく座って下を向いていました。

「ふむ、じゃあ生前の心残り……って言うのかは知らないが未練はあるか？」

男の人はふうつと煙を吐き出しました。

「いえ、あの時はよく覚えてません。ただ……」

少女は少し豪華な椅子をカタンと揺らせました。

昔から少女はロッキングチェアが大好きだったから癖になってるのかも知れません。

「ただ？」

男の人は煙草を右手でくるくる回しながら視線だけ少女に向けまし

た。

「変な声が聞こえたんです。

『何を望むんだ』みたいに……。」

確かに少女は聞きました。

その時に何か光のようなものを見たような気がしました。

「俺や他の奴も聞いたことないな……。もしかすると……。」

男の人はくるくる回す右手を止めてもう一度煙を吸い込みました。

「強く思い浮かべてみてくれないか？自分の中にある一つの大切な何かを。」

男の人は回していた煙草を灰皿に押し付けて言いました。

少女はやっぱり初めは困惑していました。

いきなり思い浮かべろなんて言われても難しいですよ？

大切な何か……

私の大切は何だろう？

大好きだったロッキングチェア？

よく遊んでたお母さんの手作りのブランコ？

違うよね…？

少女は唸りながら大切なものを探してました。

確かに大切なものといっても沢山ありますし、人それぞれですから時間はかかるかもしれませぬ？

私の大切なものは、

少女はハッと目を開きました。少女が思ったのはロッキングチェア
ーやブランコじゃなくて、昔は当然と思っていた家族でした。

母の優しくかった笑顔と少し大人びて洒落っ気になってきた弟。その
二人がいた日常が大切だったんだ、少女は心からそう思いました。

次の瞬間に、その色褪せていない『大切』は形を変えました。最初は四角のような物でしたがだんだんと形作られ、やがては一冊の鍵穴がある、でも鍵のない本になりました。

その本は想像の域を軽く超越して、少女の膝にぼすんと落ちました。少女は一瞬何が起きたのかわかりませんでした。

皆さんも想像していた本が膝に突然落ちてきたらビックリしますよね？

「……本？」

男の人は待っている時間が退屈でまた一本の煙草をふかしていました。

男の人は机から軽々と飛び越えて少女の間近に移動しました。

「不死者の宝物なら普通は何かしら魔具に近い形なんだが、ラナが言っていた通り特殊なのかもな……」

しらっと男の人は何気なく言ってますが、かなり珍しいことに変わりはありません。

ちなみに魔具とは魔大戦で創られた兵器を指します。

つまりは普通は銃だったり剣だったり、はたまた杖や弓だったりするわけですね。

「ほら、いつまでも驚いたままなら話が進まないだろ。ほらほら、起きた起きた。」

男の人は手をパタパタと少女の前をひらつかせました。

「はっ！あ、すみません……」やっぱり少女はビックリして固まっています。

男の人はゆっくりととても大きな机にもたれかかりました。

そして煙草を左手で持ちながら右手を前に掲げました。

「…来い、月光杖。」
ユリフォリア
そう男の人が言った途端、彼の右手に月光のような淡い光を帯びた儂そうな印象の杖が具現化しました。男の人は当然とでも言うように杖をクルクル回しました。

「君が持つてる本と同じ原理で願えば出てくる。これは俺（不死者）達しかできない特別なんだよ。」

少女は呆気にとられながらもどこかで納得していました。

「あの……、私も特別なんですか？」

少女はおずおずと聞きました。男の人はため息をつき、杖で鏡の方を指しました。

「それは鏡見ればわかる。」

少女はそちらを見て目を見開きました。

少女の顔にはいままでであったものとなかったものの二つありました。一つは男の人のように鋭く尖った耳、もう一つは右目がないこと。確かに見づらいつとは思いましたが、何故か遠近感だけはあります。

「眼、眼が……！」

少女は思わず右目を手で庇いました。

男の人はそれを静かに煙草をふかしながら見てました。

「ただし、特別を得る代わりに大切なものを一つ失う。簡単に言ったらギブアンドテイクってワケ。」

杖を空中に放り投げた途端に杖は消えて空気になりました。

少女は錯乱してますが、男の人はその姿を目を少し懐古するような遠い目にしながら見てました。

「本……文献の『荊の祈祷書』なのか？フツ、まさかな。」

男の人は煙草を揉み消しながら呟きました。

少女も大分落ち着きを取り戻しましたので、話がまた進みました。

「俺みたいなのは杖は普通『魔法』が使えて、剣なんかは、ふああ…そのまま使える。簡単に言うならそのままの形が力になるんだ。」

男の人は退屈気にあくびをしながら説明します。
元々そういう説明をするのが苦手らしく所々に頭をかいてたりします。

「つまりは…えっと、剣なら剣としてそのまま使えるって事なんですか？」

少女は右目を気にしながら首を傾げて問いました。

「まあ、そういうコト。んで、ここで君に少し問題が発生するんだ。」

男の人はまた一本煙草を取り出して吸い始めました。

「杖とか剣なんかじゃなく、本ってコトが問題だ。使い方が分からないし、どういう効果なのかも分からない。」

少女は自分の持っている本を眺めて少し考えました。

自分が持っている本が何かの力を持っている、しかも他の人とは違うとなれば少女は怖くなってグツと手を握り締めました。

「私だけ…か。」

少女はため息をつきました。

『君は永遠を信じるか？』

その時、いきなりどこからか声がしました。

「えっ…？」

少女は驚いて椅子から立ち上がりました。

「ん、どうした？」

男の人は少し驚いたように顔を上げました。

「さ、さつき声が…！」

少女はわたわたとろたえて説明なんて殆どできません。

少女は不思議な声が何故か懐かしく感じたことが怖くなったのもあります。

「声？そんなものしなかつたんだが。」
また男の人は眠そうにして俯いてしまいました。
どうやら不思議な声は聞こえなかつたようです。
少女は困惑した様子であちこちに視線を巡らせました。でもやっぱり声の主は見つかりませんでした。

『君は永遠を信じるか？』
再び同じ声が聞こえました。

少女はすっかり怖じ気付いてしまいました。
でもその声は止まるコトはありませんでした。
何度も何度もこわれたテープのように繰り返しました。

少女はいつしか怖くなくなり、どこか聞いたような声でこう答えました。

「そこに幸せがあるなら。」
その言葉を言った途端に少女の中から鍵が現れました。
光り輝く金色の鍵は勝手に書物の鍵穴に入り、カチリと音がしました。

その書物は光り、瞬く間に開きました。

「……！！能力か！ユーフォーリア！……出ない！？」
男の人はもう一度右手を手を空に突き出しましたが何故か右手が光に拘束されて月光杖が出せませんでした。

「これが、私の能力……！？」少女はその中に右手を差し込みました。

それは固くそして暖かいものでした。
懐かしくそして少しほろ苦い感情の詰まったものでした。

光がやがて収まると一冊の本に変わりました。
本の表紙は『荊の祈祷書』と書かれたものでした。

男の人は目を見開きました。

「おいおい……唐突すぎだろ？本当に『荊の祈祷書』なんて運命って言われても信じるぞ？」あまりにもビックリしているのか灰皿が盛大にひっくり返っているのを気づきません。

少女はその本を手に取り、内容を見ました。

するとそこには少女がいつどこで何をしていたという事細かな日記帳のようなものが書かれていました。

「これ、私の記憶……？」

これが少女とおかしな本の出会いでした。

これから紡がれる永遠は様々。さあ…始めましょう。
優しく切ない永遠を。

第一章　始まりの永遠

昔々の古い文献を紐解くとこんな叙述がありました。

『この世界には二度、永遠と呼ばれる小さな世界が生まれました。

その世界は一人の特別な本を持った少女が作りました。

そこはあらゆるものが時を止めて、ただそこに存在するのが当然の
ような世界でした。

しかし、その永遠はやはり少女の手で壊されてしまいました。そしてその少女は人に知られずひっそりと姿を消しました。それから今日まで永遠が再び起こることはありませんでした。だからこそ、今後起こったときに少しでも知識があるように記します。

想像と緊縛の書物、『荊の祈祷書』を……。

　　～アルビハネの述書『永遠』 126節より～

パタン

少女は先程まで見ていた本を閉じました。

今では一番初め、この城にやってきた図書館の館長です。

「リエーテ様、読み終わったのならこちらで書簡整理をお願いしたいんですが。」

そう言って本棚の影からひょっこりと顔を出したのはラナでした。

「あっうん、分かった。」

少女……リエーテは読んでいた本を閉じて元の位置に戻しました。

リエーテで良いのにと口の中でブツブツと呟きましたが、すぐにそちらへ向かいました。

あの本の直後、リエーテはこの図書館を任されるようになりました。

本来、『荊の祈祷書』を持つ物が管理していたらしく、ちゃっかりリエーテはここを任されてしまいました。リエーテも最初は引き腰でしたが、最初に知り合った外見上だけかもしれませんが、同じ年のような少女、ラナがいたことで気が楽になり、今となつてはラナは友達のようなものです。

リエーテは少し嬉しいと感じながらラナのいる場所に頂いた丈の合わない少し大きい服をズルズルと床を掃除しながら歩いていきました。

ガチャリと大きな扉が開きました。

リエーテとラナは丁度午後の紅茶を楽しんでいたところです。やはり邪魔をされてかラナは少し不機嫌です。

「ん？茶会か。少し混ぜてもらおうか。」

そう言つて遠慮もなくもう一脚椅子を取り出したのは無精髭にボサボサ髪の煙草好きの男、レッグでした。

リエーテとラナはまたかという表情でした。

それもそのはず、レッグはブラブラと歩くのが好きらしくここにも頻繁に来るのです。

「今回はどう言つたご用件ですか？返答次第で貴方を強制的にお引き取りさせますが。」

ラナはいつもレッグに厳しいようです。

まあ、ラナはだいたいの人に対して皮肉を言っています。

「おいおい、今回はまともだつて。ジャッシュが帰ってくるらしいから呼びに来たんだ。」

そう言つて足を組んでゆつたりと椅子に座るレッグ。無精髭などのだらしない格好にそぐわない綺麗にスラツとした姿勢だったのでリエーテは思わず見とれてしまいました。

「ジャツシユ？確か日本に行つたはずじゃないですか？」

ラナは少し驚きながらも自分の紅茶を飲んでいました。

レッグは図書館で煙草を吸い始めました。

リエーテは溜め息ついてから苦笑しました。

三人はジャツシユを迎えに城の門まで行きました。

城が建つている場所は砂嵐が吹き荒れる荒野なので普段は外出しません。

三人共砂塵用の防護服を来ています。

ラナは釈然としない顔でブツブツと愚痴っています。

レッグは結界を作つて煙草を吸いながら歩いています。

リエーテは人見知りなのでラナの後ろに隠れるようにひよこひよこついで行きます。

門に着くと三人は壁に寄りかかり、ジャツシユを待ちました。

リエーテはレッグにジャツシユという人に興味が出て聞きました。

「ジャツシユさんて誰なんですか？」

リエーテは砂塵用の防護服をいじりながらおずおずと話しかけます。

「ん？あゝ…なんだ。この城唯一の人間で大分偏屈者だ。」

やはりジャツシユはめんどくさがりで説明になつてません。

「ラナあゝ……」

リエーテは少し涙目でラナに聞きました。

「大体なんで私が……。」

連れてこられたのが不服なのかブツブツと愚痴をこぼしてリエーテの聲が届きません。

リエーテは困り顔でうう…と唸り声をあげました。

『荒野はまるで人の心、オアシスもない殺風景なここは雨を待ち続ける。』

そう永遠に…』

『…アルビハネ述書『永遠第135節』…』

緑黄色の髪の毛を結った長髪の男は砂嵐を前にミラーシールドをかけて、サクサクと堅いブーツで砂を噛みました。

「ふむ…、永遠の古城はまだ見えぬか…。仕方ない、少し走るかな。」

どこか極東の言葉めいた話し方で呟き、左腰に添えた曲刀を携え、荒野を駆け抜けていきました。

その頃、三人はまだ門にいました。

リエーテは置いてけぼりみたいな気がして先ほどから三角座りで自分の長い銀髪をいじっています。

どうせ私なんて…という呟きが聞こえてきて少し痛々しく思えます。

ラナは相変わらず釈然としない顔でブツブツ言っています。

ラナは根に持つタイプなのでしょうか？

レッグはレッグで五本目の煙草に口をつけました。

三者三様とはこのことです。

そんな三人が待つこと30分、

ラナがそろそろ開かれた眼が危なく光りだす頃。

荒野にうすらと緑が見えてきました。

その緑は意外と早く大きくなってきて、人の形になりました。レッ

グはその人に手を上げて呼びかけました。

その人はそれに気づくとこちらに向かってきました。

その人はミラーシールドをかけた長い髪を結った背の高い男の人で

した。「遅かったなジャツシュ。」

レッグはもう一着の防塵用の防護服を投げ渡しました。

レッグはどこか嬉しそうでつつい微笑んでしまいそんな顔でした。

「すまない、少々希有な物を見つけな。遅れたでござる。」

どこか東方のなまりで話しています。

リエーテはもつと年のとつた人だと思つてましたから少し驚いています。

「……。リエーテ様、首が痛いですから引つ張らないください。」

ラナは鬱陶しそうに後ろに隠れているリエーテに言いました。やはり人見知りはなかなか直らないようです。

「おや？そちらの御仁は？」

ジャツシュはリエーテに気づいたかラナを通して見ます。

「ああ、紹介するのを忘れてたな。新しく入つたりリエーテだ、人見知りで俺もよく避けられていた。」

レッグはリエーテを子猫をつかむように服を掴み引つ張り出しました。

「リエーテ殿か。あいわかつた。拙者はジャツシュという者でござる。」

ジャツシュはリエーテと視線を合わせるように腰を折つてにこやかに微笑みかけました。

リエーテはその微笑みについ見とれました。

ミラーシールドを通した暖かな瞳はどこか弟に似てたからでした…。

その後、四人は早々に城に戻りました。

「拙者は少し疲れたので失礼するでござる。」

ジャツシュは自分の部屋と思われる部屋の前でピシッと姿勢をただして、入っていききました。

ゆっくりと三人は図書館に戻り、少しだけの本びりとしていました。そんな沈黙の後にレッグが口を開きました。

「リエーテ、ジャッシュに渋めの茶を出してやれ。少しは気休めになるだろうからな。」

足を組み直し、紅茶を啜りながらよく喋れるものです。

「私ですか……？レッグさんがやれば良いじゃないですか。同性だし知り合いですし。」

リエーテはいきなりでオタオタしています。

いきなりなことにもいい加減慣れた方が良いですが……。

「面倒だ。まあ話す機会と思って行け。」

レッグはリエーテが押しに弱いのを知って、やっているのかも知れません。

ラナは我関せずを通して、ダーズリンを飲んでいます。

リエーテはううと嘆いてからゆっくりと図書館を出ました。

「レッグ、リエーテ様をどうするつもりですか？」

ラナは横目でレッグを見ます。

「さあな、面倒だっただけさ、常時通り……な。」

レッグはゆっくりと煙草に火をつけました。

その煙はどこか空虚な気がしました。

リエーテは少し扉の前で悩んでいます。

（このまま入っていいのかなあ……良いわけないよねえ……よし引き返……）

「おや、リエーテ殿ではござらんか。拙者に何かよつでござるか？」

「ひう！？」

いきなり突拍子のない声を出してリエーテはティーセットを持ちな

がら後ずさりしました。

「驚かせてしまったでござるか？それは申し訳ないでござる。つい、気配を消してしまうのでな。」

ジャツシユは頭をかきながら、苦笑じみて言いました。
リエーテはというとまだ膠着状態から抜け出せません。

人見知りのせい以上かもしれません。やはりいきなりは怖いんでしようね。

「いや、そこまで驚かれたら少し申し訳ない。何かようであつたのでござるう？ささ、何もない所でござるが、お入りください。」
ジャツシユは少し困り顔になってから固まっているリエーテを中へとぐいぐい押していきました。

「……………まあ、そんなところだよなあ。」
レッグは壁の隅から杖を持ちながら出てきました。

「だからと自分の認識を消してまで尾行しないでください。リエーテ様が可哀想です。」

そう言つてラナもひよっこりと隅から出てきました。

……………どうやら2人はリエーテを尾行していた様ですね。
ジャツシユの部屋は少しの本と変わった床をした場所でした。

「リエーテ殿、申し訳ないでござるが、ここは『タタミ』という床で靴で入れないでござる故に靴をお脱ぎください。」

と、ジャツシユは自分のブーツを少し開いた玄関のようなところで脱いでいます。

リエーテは少し迷つてからそういうものかと少しヒールがかつている靴を脱ぎました。

…今まで引きずっていた布地のドレスは良いんでしょうか？

「えと、あの……疲れているだろうと思ってお茶を淹れてきましたんですけど……。」

リエーテはしどろもどろです。普段はレッグとラナしか話しませんからまだ慣れてないんでしょうね。

「おお、そうでござったか！かたじけない。そこに置いて下さるか？」

と、ジャツシユが指したのは丸い小さなテーブルでした。

リエーテはティーセットをそこに置いて、ジャツシユに進められたザブトンというものにちょこんと座りました。

「くそつ、この床固いな……。」「レッグはもう一階上の部屋で細長い工具を持っていました。

「もう止めた方が良いと思いますけどね。大体何でレッグはそこまでしつこいんですか？」

この二人はまだまだ粘る様子で工具片手に奮闘していました。

リエーテとジャツシユは無言で向かい合ってお茶を飲んでいきます。

リエーテは椅子が慣れてるのかペタンとザブトンに座るのがいやなのか分かりませんがソワソワしています。

そんな空気の中、ジャツシユは口を開きました。

「リエーテ殿はどういう想いで不死者になったでござるか？」ジャツシユは目配せし、カタンとカップを置きました。

「えっ？」

リエーテはいきなりのことですからやはりしどろもどろです。

「拙者達がいるここ、『永遠の城』に住まう者達は少なからず何か『強い想い』があるのでござる。故に興味がでたのでござるよ。」「

ジャツシユは少し真剣な口振りで言いました。

「私は……、」
リエーテは少し考えました。
自分がここにいるのはあの本があるから。
でも、私の想いは何なんだろうかと。

「……いや、拙者が聞く権利はないでござるな。どうか忘れてくだされ。」

ジャツシュはフツと寂しい笑みを浮かべてリエーテに言いました。

「あの…どうしてそんな顔するんですか？」

リエーテはそれを不思議に思っただジャツシュに聞きました。

リエーテは少しジャツシュに興味が出たのかも知れませんが。

「ふむ、ただの人見知りな少女と想ってたでござるが、とんだ勘違い……か。」

ジャツシュはフツと笑みをこぼすと、忘れてくれとリエーテに言いました。

リエーテは気まぎれになたと内心で後悔しました。

「あの、その…もうそろそろお夕飯ですから失礼しますね。」
リエーテは口実を作って逃げようと思いました。

リエーテらしいと言えばリエーテらしいですね。

その時、天井からパラパラと砂が落ちてきました。

「ふえっ？」

リエーテは拍子が抜けたように被っていた装飾が少し豪華な帽子がズレました。

「リエーテ殿っ！」

ジャツシュはすかさずにリエーテをかつぎ上げその場から脱しました。

ズドンという衝撃と共に天井が落ちてきました。

「痛っ……穴開けすぎたか。」天井の埃と共に無精髭をポリポリとかきながらレッグの姿が見えました。

「まったく、だから止めといた方が良かったんです。」シュタツと上から軽々と降りてきたのはラナでした。

リエーテとジャツシユは驚きや呆れを通り越して笑うことしかできませんでした。

さあ、このちよっぴり苦く楽しいお話はおしまい。

次のページへと進みましょう。皆さんしっかりついてきてくださいね。

第二章 天秤の永遠

『昔々のお話ですが、

ある村には怖い竜の迫害を受けていました。

村では毎年一人の美しい娘が贄に選ばれて竜が住む洞窟に入ったつきり出てきませんでした。

今年、ついに永遠の少女が選ばれてしまいました。

いくら不死者と言えども竜には殺されると思いました。

少女は一人で竜の洞窟へ行かなくてはなりません。

暗い暗い洞窟を一本の松明で進んでいきました。

すると、どこからか啾り泣くような声が聞こえました。少女はその声の方へ導かれるように行きました。

そこには一人の少年がいたのです。

少女はどうして泣いているのと尋ねました。

少年は悪い魔法使いに醜い竜の姿に変えられて洞窟から出られないと嘆きました。

少女は少年を可哀想に思い、周りを探りました。

そこには一对の弓と矢がありました。

少年は構わないから殺してくれと言いました。

少女は嫌でしたが、他に方法が思いつかなくて弓で少年を射抜きました。

その後少女も死のうと思いましたが、永遠の力で死ねませんでした。そして、今でも少女はその洞窟で死ねないと嘆いているのです。

』

ネアンシャル童話『怖い竜と永遠の少女』(引用)

パタン

リエーテは少し重たいハードカバーの本を閉じました。

今日は初めて街に行く日です。リエーテは少しうきうきしながら外用の少し露出の多い服を着ます。

眼帯も砂塵用に包帯にしています。

「ラナっ！早く行こうよ！」

リエーテはラナの手をがくんがくんと振り回します。

「リエーテ、様、い、たいですか、らやめて、下さい！」

ラナは振り回されながらも拒否の反応を示します。

リエーテもやはり女の子。

買い物が大好きなお年頃なんです。

「あっ、ごめん…つい…久しぶりだからはしゃいじやった。」

リエーテはちろっと舌を出しました。

ラナはまったくと溜め息をついて少しだけ微笑みました。

「あ！今笑った！ラナ可愛い」

リエーテはその表情を見て満面の笑みを浮かべました。

「別に笑ってません、少しひきつただけです。」

ラナは少し横見しながら口調を強くしました。

その顔に少し赤みがさしているのは言うまでもありません。

リエーテはクスクスと笑いながらラナの手を引っ張りました。

ラナも多少は気遣ってか少しラフな服装です。

そして何故か手には二つの小銃がありました。

リエーテはその小銃にびっくりしました。流石にいきなり出されても困りますよね。

「リエーテ様、城の外は何かと危険ですのでお持ち下さい。」
ラナは淡々と言い放ちます。

リエーテは当然、銃なんて殆ど持ったことありません。
使ったのは狩りだけだったんですがそれでも銃は嫌いでした。

「う、受け取れない……。ラナあ……。」

リエーテは涙混じりにラナに寄ります。

本当に子供のようです。

「ダメです。いくらリエーテ様でもこれは持っていただきますので。」

ラナはズイとリエーテに小銃を渡しました。

冷たくて重い感触にリエーテは嫌だなと思いました。

「その双銃は二つで一对ですから取れませんので気をつけて下さい。
また……。」

ラナの説明が始まりました。

リエーテはううと呻いて渋々説明を聞いていました。

あまりリエーテは銃に良い思いがありません。

死んだのも銃に撃たれて動けなかったからですし、無理もありません。

リエーテはこのまま何も無い方が良いのになと呟きました。ツタツ
タ……

少し奇妙な靴の音がします。

その足跡は遠く彼方から続いています。

「永遠の城……。義兄さん、僕はまだ帰れませんね……。」

少し落ち着いた言い方でチリンと鈴の音を響かせて城とは正反対に
歩き始めました。

リエーテはラナの後ろに隠れてました。

何故かは皆さんも知っている通り、人見知りしたからです。

「リエーテ様、首が痛いので手を離して下さい。」

ラナは少し鬱陶しそうに言いました。

「うう……こんなに人がいるなんて知らなかったんだよう？しかもみんな見てるよ……。」

リエーテはぐったりしてラナに更にすがりつきます。

ラナも少し目が細くなっています。

少し呆れたようですね？

「当たり前なんです。この辺りにそんなに多く不^{エルフ}死者がいると思ってるんですか？」ラナはリエーテの手に自分の手を重ねながら言いました。

「しかも意外と綺麗ですから私から離れたら襲われるかもしれませんね……ククツ」

ラナはにんまりと笑いながら首を90度以上回転させてリエーテに言いました。

リエーテはさらにびっくりしてラナにしがみつきました。

ラナはこの事を予測していなかったのか目を見開いています。

クスツ、本当に仲が良いのでしょうかね……リアーミルとよばれる町は比較的大きな町です。

それでも目に留まる不死者はそういません。

「ラナー！これラナに似合わない？」

やっと調子を取り戻したリエーテは洋服選びにパタパタとかけていきます。

「リエーテ様、私にフリルは似合いません。」

ラナは率直にズバズバと言っています。
それでもリエーテのなすがままに来ては脱いでますが…。

その後リエーテが飽きるまでずっと続けていましたが、二人は疲れ
たらしくラナは飲み物を買ってきますと言って出かけました。

リエーテは約束していた噴水前まで挙動不審になりながらもたどり
着きました。

そこはリアーミルで最も代表的な場所らしく、人がワラワラといま
した。

当然そんな場所にリエーテはいれませんので、物陰に隠れるように
逃げ込みました。

「アタシの場所にアンタ何かようかい？」

物陰の先から少し囁しやがれた女の人の声がしました。

リエーテはびっくりして壁に引っ付いてしまいました。

「…アンタも不死者が、つくづくついてないんだねえ。」

そう呆れた口調で言いながら女の人は立ち上がって近づいてきまし
た。女の人の服装はつきはぎだらけの粗末な服で、そして髪は黒く
くすんでいました。しかし、一番驚いたのはその人の耳が長い不死
者の証だったことです。

リエーテはやはりまだ壁に引っ付いて震えています。

「別に取って食おうなんて考えちゃいないさ。アタシはレイシア、
アンタは？」

レイシアはパタパタと手を振ってリエーテに近づきます。

リエーテはおずおずと少し後退しながらリエーテですと言いました。

「アンタも何か？不死者って事は逃げてきたのか？」

レイシアは少しボサボサした髪をかき分けながら言いました。逃げ
る？何からだろうとリエーテは考えました。

「あ、あの……私は友達と買い物に來ただけで逃げてきてはない、
です。」

リエーテは勇気を振り絞って言いました。

レイシアは少し驚いた顔をしました。

「友達って不死者だよな？」

「い、いえ……ちょっと変わった娘だけど人間です。」

リエーテはおずおずとレンガ作りの壁に寄り添いながら言いました。

「やめときな！」

レイシアは急に大きな声をだしました。

リエーテはビクツと肩を震わせました。

「人間なんて『キタナイ』んだよ。アタシ達は関わっちゃいけない
んだ！」

レイシアは激昂した口振りで言いました。

その次に聞こえたものは凶太い男の声でした。

「脱走した不死者を見つけたぞ！他にももう一匹いるぞ！」

その男は仲間を読んでいるような口振りででした。

「チツ！アンタも逃げるよ！」レイシアはリエーテの手を引っ張り
その路地裏から駆け出しました。

しかし、所詮は女性の足、別段早くもない2人はすぐさま追いつか
れてしまいます。

リエーテは考えてました。

(どうして……私はただいるだけなのに追いかけれないといけないの？)

また、私を迫害するの……？

そんなの、嫌だ！)

その時荊の書がささやきかけました。

『こう唱えればいいのだ、愛しき子よ』

そう圧倒的な言葉が脳髄に響きました。

リエーテは無意識にその言葉を紡いでいました。

「バインドワーズ(言葉の呪縛)！」その言葉は遠く澄んだとても美しい旋律でした。

その効果は直ぐに表れました。

「急遽、右変更、女、理論的、追跡！」

男の放っていた指示が全てぐちゃぐちゃになり指揮系統が取れなくなっただのです。

2人はその隙に色々な場所を回り、男を振り切りました。

「っはあ、はあ、はあ」

2人は逃げることにだけに必死でしたから息も絶え絶えでした。2人はまた物陰に隠れ、息を整えました。

「あの…、あの人達は一体？」リエーテはおずおずとレイシアに尋ねました。

「チツ、不死者狩りさ。」

レイシアは壁をガツと叩きながら舌打ちしました。

リエーテは頭をガンと打たれたような気がしました。

「不死者をあいっすらどうすると思う？」

捕まえて死なないからって脳をグチャグチャに改造して永遠に動く機械に変えるんだ。

壊れても勝手に治るし疲れもしない。

だからあいつらはやってくるんだよ。」

レイシアは反吐を吐くように言いました。

リエーテは愕然としました。

何故簡単にそんなことが出来るのか、そして平気でいれる彼らが釈然としなかった。

「同じ『人』なのにどうして……、どうしてそんな……」

「同じじゃないんだよ、人間なんてそんなもんさ。だから関わらない方が良くないんだ。」

違う、不死者なんてあっちゃならないんだよ。」

そうレイシアは歯を食いしばりながら言いました。

「でも、不死者であることってイケない事ですか？」

リエーテは少し言い淀みながらも言葉を返しました。

「いいかい？リエーテ、不死者って者は所詮与えられたモノなんだ、だからアタシには必要なかった。」

そんなものにすぎるならいっそ地獄でも行く。」

レイシアは遠い場所を見つめていました。

「永遠は与えられたモノ……、でも私は……」

リエーテは呟きました。

永遠が拒絶されるなら自分は誰なんだろうと、

「それじゃあ幸せになれないじゃないですか、幸せになるために不死者になつたのに……。」

リエーテは苦虫を潰すように言いました。

「……そっか、アタシとアンタは違うね。アタシの幸せはね、自分で

見つけ、そして信じれる仲間がいることさ。

今は仲間さえいないけどね。」

レイシアは軽く微笑みました。それがリエーテの見たレイシアの最後の表情でした。

「リエーテ、友達を待たせてるんだろ？ほら、アタシといたくないとさつさと行きな。」

レイシアはポンとリエーテを町に押し出しました。

リエーテはそんなレイシアが辛そうに見えました。

「君かい？僕を呼んだのは。」

リエーテが出ていった場所とは反対側に一人の不死者が立っていました。

レイシアはさも当然のようにそちらを向きました。

「アタシさ、アンタ名前は？」

「名前なんて必要ないと思うけど、それが願いなら……。」

僕はアージェ・フォン・ブリュンヒルデ。」

闇の中から声がしました。

男の人の顔はよく見えません。

「アージェか。少し願いがあるんだけど、良いかな？」

レイシアは少しだけ思い出して微笑みかけました。

「さっきの娘にこのペンダントをあげてくれないかな？アタシは恥ずかしくてさ。」

「……うん、望みは引き受けたよ。じゃあ、良いかな？」

アージェは優しい口調で闇から少し布に包まれた手を差し出しました。

「ああ、心は決まってるよ。」

レイシアはふつと哀しい笑顔をしました。

「じゃあ、これで良いんだね。『君の望みは何だい？』」
「シヤランと鈴の音がしました。」

「アタシは仲間の下へ。それが望みさ。」

そうレイシアが言った途端光が満ちました。

「ありがとう、アージエ、あの娘のことよろし……」

レイシアの言葉が最後まで続くことはありませんでした。

残ったのはアージエの手にある赤色のペンダントだけでした。

「リエーテ様！どこに行ってたんですかっ！」

リエーテは当然のこのようにラナに怒られました。

「ご、ごめんなさい……」

リエーテはすくすく謝っています。

ラナはやはりお怒りのようで、今回はいつもより長いお説教を頂いてました。

終わった後に頭を撫でられたリエーテは少しご機嫌でしたが。

帰り際にある一人の不死者が目を惹きました。

その少年を少し大人びさせた感じで不思議な鎧のような服を着ていました。

「見つけたよ。」

その男の人は言いました。

リエーテは少しびつくりしましたが、不思議と会ったような気がして隠れはしませんでした。

「……リエーテ様に何のようですか？卑猥な事の場合は直ちに排除します。」

ラナはリエーテの前を塞ぐように立ちました。

「あつと、失礼。レイシアからの届け物を預かってきたんだ。だから通してくれないかな？」男の人がレイシアの名を口にしたのでリエーテはラナからひょっこりと顔を出しました。

「レイシアさんから…?」

「リエーテ様?」

ラナは不思議な顔をしていました。
アージエはくすりと微笑みました。

「はい、君にあげてくれって言ってたよ。」

そう男の人は言いました。

それは少しくすんでいる赤色を基調にした珠玉のペンダントでした。
「これをレイシアさんが…、それなら何でレイシアさんがいないんですか?」

リエーテはそれを大事そうに受け取ると男の人に尋ねました。

「レイシアは柄にないからってどこかに行ってしまったよ。」それは呆れたようにやれやれと言った口調でした。

「じゃあ、何でそんなに悲しそうなんですか?」

その言葉にリエーテは聞きました。

男の人の表情は呆れながらも楽しそうな顔に見えました。

その顔が悲しそうとはおかしく思いました。

「…フッフ、人には色々あるんだよ。それじゃあ僕は望みは果たしたから。」

そう言っつて男の人は反転しました。

「君のその手のひらにある鈴、強く念じれば僕はまた君の前に現れよう。じゃあね……」

そう言っつて男の人は人混みにちりんと袖についている鈴を一際大きく鳴らしながら消えていきました。

リエーテの手のひらにはいつの間にか鈴が一つありました。

「とても澄んでいて美しい…でもどこか哀しい音、あの人のような……。」

コトン、生と死の天秤は今日も旅をする…
鈴の音の願いに導かれて…。

チリン……

「鈴の音……？」

レッグは窓の外を覗きました。

「どうしたのでござるか？」

ジャツシユは物珍しそうに尋ねました。

「さつき鈴の音が……いや、気のせいだな。アイツは今頃……」

レッグは遠い目をして言いました。

その瞳には黒く澱んだモノが見えたような気がしました。

ジャツシユは不思議そうな顔をしていました。

「おっと、悪いな。チエツクメイト。」

レッグは今までやっていたチエスの駒をコトンとジャツシユの王の前
前に動かしました。

「なっ！？ま、待ったでござる！！」

ジャツシユは大慌てでした。

「待ったはなしだ。ほら、続きをしる。」

レッグはまた煙草を吸い始めました。

チリン…チリン…

窓の側には金のメッキをした鈴がありました。

それはいつの日かあった思い出

さあ、今回はこれでおしまい。今度はもっと優しい永遠でありますように……。次のページをさあめくりましょう…

f i n

幕間『ラナと黒猫』

リエーテ様に待っていると行って、飲み物を買ったのは良いにしても…

「待つはずのリエーテ様が何故いないのです……!!」

ラナは飲み物を持った両手をわなわなと震わせています。

やはり大分怒ってるようです。毎回毎回怒られるリエーテもリエーテなんです、

なー。

ラナの足下に何かか鳴いていました。

ラナはそちらへ向くとそこには黒猫が一匹ラナの足下にちょこんといました。

「猫ですか、私に何かようなのでしょうかね？」

クツクツと笑い、まったく気にしない様子でつかつかと歩き始めました。

な！。

「……。はあ、一体何だと言っんですかね。」

少しラナはブックサ言いながらもどことなく笑顔でした。

ラナは少しだけ猫を撫でてやりました。

猫は気持ちよさそうに目を閉じていました。

「いずれ終わってしまう命なのに猫はここにいるのですか。」
ラナが少し寂しげに呟いた気がしました。

な！。

猫はそんなラナを知ってか知らずかただ気持ちよさそうに鳴いていました…。

幕間 f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1043e/>

永遠の居場所 ~ Eternal Whereabouts ~

2010年10月28日08時37分発行